



Photo by ; Sonoko Tanaka

特集2 福武教育文化振興財団フォーラムvol.02

「ここに生きる、ここで創る」—生活と文化、そして地域の未来—

福武教育文化振興財団では、地域づくりについてみんなで考える場として「ここに生きる、ここで創る」フォーラムを開催しています。今回は岡山県北に暮らしながら、国内外へ活動を発信している30代の若者たち、杉浦慶太氏(写真作家)、山崎樹一郎氏(シネマニワ代表)、井筒耕平氏(美作市地域おこし協力隊)に「暮らしているからこそ見える、可能性」についてそれぞれの想いを語っていただきました。(3月2日ルネスホールにて)

トークセッション「暮らしているからこそ見える、可能性」

杉浦慶太 × 山崎樹一郎 × 井筒耕平 コーディネーター／山川隆之

▼Uターン、Iターンの彼らが、なぜ「ここ」を選んだのか

杉浦——大学を卒業し、東京で若い人ばかりが集まる写真スタジオに3年ぐらい勤めた。そこからワンステップ上がるためには、誰かのカメラアシスタントになるか、どこかの大きなスタジオに入って専属カメラマンになるかという、カメラマンとしての選択が2つあった。ちょうどその時に自分の家が商売をしていたが、経営が危うくてたちゆかなくなって、私が長男だったので帰るしかなくうとうと腹を決めた。

その裏にはもう一つ理由があり、このままでは写真作家として通用しないなど。現代美術という一種の箱庭的な世界の中でさえ、自分の持っている経験とか論理を全部集めたとしても歯が立たないと思った。表現のバックグラウンドを地固めする必要があった。表向きは家族のため、長男だから家族のためといっているが、写真のためでもあった。その2つの理由ですね。

山崎——もともと関西、大阪で生まれ育って京都で学生時代を送り、いろんな映画の現場に出入りしたり、映画を作ったりしていたけど、京都で作ることに飽き足らなかった。杉浦さんが地固めと言われましたが、日々食べているもの、口に入れているものがどういう状態であり、いろんな野菜がどんな状態であり、どういう販路で食卓に来るのか、どんな肥料が使われているのか全くわからないことに気づいて、それは何かを表現する以前の問題だと思った。祖母が真庭で一人暮らしをしていたこともあって、農業をしようと思い7年前に移住した。父親は大阪に居るので、Uターンではなく2世代かけてのUターンとなった。

井筒——愛知県岩倉市出身で、東京で国の自然エネルギーの政策作りなどのコンサルタントを経て、岡山には7年前に備前市のプロジェクトがきっかけで来た。コンサルタントというのは外から入ってきてその地域のために仕事をしてまた帰っていくという感じのたち位置。5年間ぐらいはコンサルタントの気持ちで仕事をしてきたが、今は完全に地元の人間として。人間的なネットワーク、エネルギー資源もあるし、そういう専門性は持ちながら地元人としてここから発信もしている。もう一つ付け加えるなら、コンサルタントは木を切っていないのに木のエネルギーを語る。木を切ったことがないのに行政に対して言うてはいけないと思った。だから、林業をやり始めたし、米作りもしている。そしたら言葉に説得力がつく。今は精神的に余裕そういう感覚です。

▼「地域」の中で生み出されるもの

杉浦——現代美術は学問だからコンテキスト(文脈)を理解しないと目の前の作品はわからない。作品を読解する経験値が必要。それを田舎の人に理解してもらおうというのは最初から思ってなかった。現実的に仕事として成り立たない。だったら自分で安定的な収入を確保しようと。それは山で木を切るという肉体労働。仕事はきつけれど選んで正解だった。おかげで撮りたくない写真を撮らなくていいし、やりたくないことをやらなくていい(笑)。

歴史とか風土的なものを感じながら地域社会を撮ってはいるけれど、結局根本にあるものはセンチメンタルなんじゃないかと思う。人間は成長し続けるというけれど

も朽ちていく自由、衰退していく自由も選択肢としてあるし、そこに美を見出してきた世界的にも稀な美意識の歴史を我々も持っている。だから、一見ダメな(写真映えない日常的)風景も結局はそれも「あり」なんじゃないかと肯定的に捉えられるんだと思う。

山崎——僕たちみたいに低予算でやっている団体は、勝手に誰かに上映してもらおうというわけにはいかない。地域で生まれた映画を地域で見せたいという思いは、映画に関しては特にあるので、そこまでしないと映画は終わらない。東京でそれこそ作りたくない映画を作るとか、東京のクルーがこっちに来て撮影し、東京に持って帰って上映だけ東京ですることになってしまう。地域で作って地域で見せるところまでしないと残らない。

目指していることの一つで、本来、芸術とか文化は、田植え歌とか、労働の疲れを癒したりする、歌ったりすることで疲れを癒すというところは目指しているところ。自分たちは労働から得た何かで表現することによって、こっちは癒される瞬間があると、僕は励みになっている。

井筒——僕は変えることがベストと思ってない。今僕が目目しているのは縄文時代。この時代のあり方がベストだと思う。縄文を取り入れて、何もないところからどういうふうにしたら今の僕たちの生活がベストなのだろうか考えた時、縄文の人たちって、近くのものを取るとか、鹿やいのししをとって、どんぐりを拾って暮らしていた。それは環境問題とか言わなくて、普通にそうしていた生活が確かにあったわけですから、それから学ぶことはある。

地元の人たちとは、必ず関係性が出てくる。なぜなら田んぼを借りているし、山に入っているから。僕らはいっさい土地を持っていないので、すべて地元の人たちにお願している。そして、山仕事や田んぼをやっている姿を地域の人に見てもらおう。あいつらいるなっていうことが大切。そうするといろいろなサポートをしてくれる。行政に対して報告書を出しているだけだと地元の人には見えない。そういうわかりやすいことを継続的に見せてあげることが大事なことだと思う。

▼地域で生きる可能性と未来

杉浦——自分の作品が地元の多くの人に受け入れられればそれに越したことはないと思うが、それが別に目的ではないので、今のペースのまま静かに制作を続けたいと思っている。穏やかな環境の中で静かに制作をしたい。それが出来るのが地方のメリット。現代美術作品の制作にとって必ずしも恵まれているとはいえない環境の中で生じる精神的な負荷は、作品を作ることによって解放されるので、いまのままで問題ないと思っている。

山崎——農家と映画、両方をやめたくない。続けていく中で、次は一揆を描こうと思っている。これがもしかして映画の最後になるかもしれないかという思いで作りたいなと思っていて、これの先に次に映画があるかどうかはわからない、見えない。とりあえず一揆を起こすように、一揆の映画を作るのを1年2年3年ぐらい、やろうと思う。

井筒——最近、上山でタップダンスを始めた。タップダンサーで世界を回っていた人が上山に移住を決めて、英田上山達歩団を作った。この巻き込み方が半端じゃない。ブロードウェイで、みんなで踊ろうみたいな大きな野望をもっていて(笑)。僕が山とかエネルギーで巻き込んできた力が、すごくしょぼく感じるぐらいにタップ団はすごい。何がいいかということ、そういう文化的なことはみんな好きなんだと。僕は、すべての表現している人よりも表現力は低い。ただ、表現することで、むしろ皆さんのリアルな社会において、新しい創造をするってことにつながるような価値を持つと思った。僕のレンジに表現するとかはなかった。

★フォーラムを終えて——山川隆之

きっかけは三者三様だが、たどり着いた地域でそれぞれ自分のめざすものを大切にしながら活動を続けている3人の話を聞きながら、地域に根ざすことで生まれる「文化」があることを、改めて確信した。生半可ではないエネルギーは必要だが、30代という可能性に充ちた彼らが進んでいく道は、周囲のオトナたちをも巻き込み、新しい世代をひきつける魅力にあふれている。参加者たちにいい刺激を与えてくれたのではないだろうか。



杉浦慶太 Keita Sugiura
写真作家

1980年岡山県生まれ。津山市在住。
2008年「GEISAI#11」銅賞、「I氏賞」大賞
2009年「Daydream」(MaxProletchGallery / ニューヨーク)
2010年福武文化奨励賞、「inkjet」(CASHI / 東京)、
「杉浦慶太展—農村の意匠」(奈義町現代美術館 / 岡山)



山崎樹一郎 Juichiro Yamasaki
cine/maniwa 代表

1978年生まれ。2007年にcine/maniwaを設立し、真庭地域で上映会活動を開始。2012年第13回岡山芸術文化賞グランプリ。2作目となる「ひかりのおと」で平成23年第24回東京国際映画祭日本映画・ある視点部門正式出品。平成24年第41回ロッテルダム国際映画祭Blight Future部門正式出品。第7回大阪アジア映画祭特別招待作品部門正式出品作品。2012年福武文化奨励賞。



井筒耕平 Kohei Izutsu
美作市地域おこし協力隊

1975年愛知県出身。美作市在住。名古屋大学大学院環境学研究所へ入学。木質バイオマスによるエネルギー自給モデルについて修士論文を執筆。2005年に岡山県備前市のプロジェクトへ参加し、ベレットストープ、太陽光発電、省エネ事業を担当。2011年美作市地域おこし協力隊に参加。2012年秋に村楽エナジー株式会社を設立し、代表取締役兼CEOに就任。



山川隆之 Takayuki Yamakawa
編集者、吉備人出版代表

1955年岡山市生まれ。三重大学農学部卒業。生活情報紙編集長を経て95年に株式会社吉備人を設立。「のれん越しに笑顔のぞく」「愛だ!」上山棚田団—限界集落なんて言わせない!などの編集を担当。岡山ベンチャー会員、NPO法人アートファーム理事。2012年福武文化奨励賞。